

ミャンマーにおける精霊信仰－漁民の船霊信仰を中心に－

関 泰子

— 目 次 —

1. はじめに
 2. ミャンマー東南部・調査地の概要
 3. ミャンマーにおけるナツ信仰
 4. ミャンマー東南部の船霊信仰
 5. 漁民と「ボーボーギー」信仰
- 結論

1. はじめに

2017年6月伊豆沖で発生した米国軍イージス駆逐艦「フィッツジェラルド」とコンテナ船の衝突事故により、駆逐艦側に多数の死傷者を出したことは記憶に新しい。我々はこの事件により、現代の造船技術の粋を極めた、最新鋭の通信機器を搭載した軍艦であっても、ふとした何かのきっかけで深刻な海難事故が引き起こされることを再認識したといえる。船乗りや漁民にとって、現代においても、海は常に何が起こるか分からない「異界」なのである。

筆者は、ミャンマー東南部沿海部地域における船霊信仰⁽²⁾について、タイ南部の船霊「メー・ヤー・ナーン」信仰と比較しつつ、数年にわたり調査を行ってきた。船首に船霊が宿るとみなし、舳先に布を巻いてその信仰の証とするのは、タイと国境を接するミャンマー東南部沿岸漁民にも見られる文化である。「海」と

SEKI, Hiroko 四国学院大学社会学部 教授、東南アジア社会研究

いう現代の「異界」を相手にするミャンマーの漁民や船乗りにとって、「海」は、最新鋭の機械設備と共に、神仏に頼りながら臨む場所であり続けている。そして、漁民や船乗りを乗せた船を守る霊的な存在として信仰される対象が「船霊」である。

また、船霊を「メー・ヤー・ナーン」という女性の精霊と考えるタイ文化同様、ミャンマー東南部沿岸地域「マシンマー」「ラマインシマー」などと呼び方は異なっても、やはり船霊を女性の精霊と考える地域は多い。こうしたミャンマーの船霊信仰を「女性が男性の航海を守る」と考える信仰であると考えれば、後述するように日本列島西南部で信仰されてきた船霊信仰と共通する点も多い。しかし現状では、ミャンマーの精霊信仰であるナッ信仰についての研究の蓄積は決して多くはない。特に船霊を含む漁民の信仰についての研究は皆無に等しい。日本の船霊信仰と比較するには、更に一層の研究の蓄積が必要である。

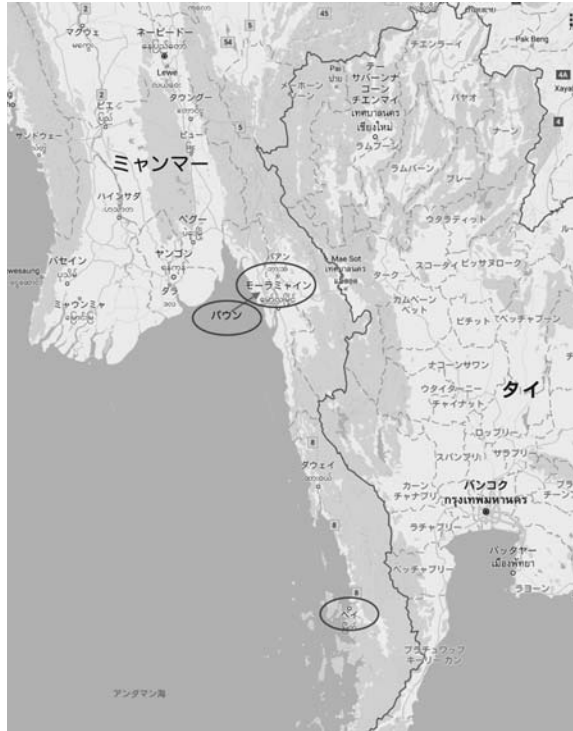
以前の論文で筆者は、ミャンマー東南部の中心的都市モーラミヤインの漁民の船霊「マシンマー」信仰について考察した。その際、これがモーラミヤイン周辺のモーン族漁民の信仰である可能性もあると述べた。その後、モーン州の他の漁村やタニンダーリ管区随一の漁港と言われるベイにおいて、船霊についてのフィールド調査を実施した。⁽³⁾本稿はその調査の結果を加味し、ミャンマー東南部の船霊信仰についてより総合的な記述を目指す。また、漁民／船乗りの船霊信仰は陸上におけるナッ信仰とどのように結びついているのかについても考察したい。

2. ミャンマー東南部・調査地の概要

本論でとりあげる調査地は、モーン州モーラミヤイン、パウン、ならびにベイ⁽⁴⁾の漁村地域である（地図1参照）。

モーラミヤインおよびパウンはモーン州に位置し、ベイはモーン州の南、ミャンマー連邦の最南端となるタニンダーリ管区⁽⁵⁾に属する。タニンダーリは管区とはいえ、その民族構成は多様であり、タイとミャンマーが歴史的にその領有を争った地域である。ゆえにその文化的背景は複雑である。地図1からも明らかなように、ミャンマーの経済的中心地であるヤンゴンから遠く、他方、タイとは長い国境線を挟んで地理的にも文化的にも近い距離にある。元々は、ダウエー人と呼ば

れる先住民、モーン族、カレン族、タイ族の漁民が混じりあって住んでいた。11世紀頃からパガン朝（ミャンマー）の領土であったが、13世紀より16世紀頃までは、スコタイ・アユタヤ朝（タイ）の勢力圏に入る。その後、16世紀後半、ミャンマー中央部ではトウンゲー朝が興り、それにより再びミャンマーの影響下におかれる。トウンゲー朝の衰退と共にアユタヤ（タイ）の影響下に戻り、18世紀に入ると、タイ、ミャンマーそれぞれの王朝の隆盛に伴い、



めまぐるしく支配者が変わる。つまり、タニンダーリは、タイのチャオプラヤー川流域やタイ湾からベンガル湾への出口に位置するため、エイヤーワディー川流域やチャオプラヤー川流域に成立した内陸大政権が、交易利権をめぐる支配権を争った地域なのである（伊藤 2011:31-32）。

1765年、コンバウン王朝（ミャンマー）は、この地域の支配権を完全に握るが、第一次英緬戦争（1824-1826）での敗北により、モラミヤインと共に英国に割譲される。英国植民地時代には、インド系／中国系移民やタイ人、マレー・ムスリム等が移住してきた。そして1948年、連邦国家としての独立により、再度正式にミャンマー領土となった。このような歴史的背景ゆえに現在でもこの管区における民族構成は多様である。

一方、モラミヤインとパウンが位置するモーン州は、モーン族が多く住む州である。現在、ミャンマーのモーン族は有力な少数民族の1つとして、カレン族、

シャン族等と共に自治州を認められている。モーン族は、ミャンマー南部の先住民族の1つであり、古代から東南アジア大陸部における海洋民として知られる。州都はモーラミヤインである（地図1）。サルウィーン川河口に拓けたこの町は、古くはモーン族の古代国家ハンタワディ王国の記録に登場するというが、歴史上にその名が知れ渡りようになったのは、第一次英緬戦争以降である。同戦争に勝利した英国に割譲され、その後第二次英緬戦争時まで、英領ビルマの首都となり、「リトル・イングランド」と呼ばれたほど大きな英国人のコロニーも存在した。モーン族はミャンマー国内においても特に仏教への信仰心が篤い民族であると言われる。主要民族であるビルマ族と同じ宗教であるため、ミャンマー社会への同化は進んでいると言える。しかし、このような歴史的な事情から、モーラミヤインはモーン州の中では英国植民地期に移住してきたインド系ヒンドゥー教徒やイスラーム教徒住民が多い特殊な町であり、むしろタニンダーリ管区の諸都市と共通する多民族港湾都市という諸特徴を持つ。

英国統治時代に作られた整然と区画されたモーラミヤインの町並みは、現在でも、ミャンマーの他の都市とは異なった、独特の趣がある。現在約30万人の人口を抱えるモーラミヤインの民族構成は多様であり、英国統治期に同じく英領となっていたインドから大量の移民が流入し、こうしたインド系住民が住むコミュニティが市内に点在する。古来から海洋民として知られるモーン族であるが、モーラミヤインは東南部経済の中心地であり、また陸路でのタイ交易、海路での海外との交易において重要な役割を果たす港湾都市でもある。

本論文で取り上げる船霊信仰については、こうしたタイとの歴史文化的なつながりや、モーン文化、英国植民地期の社会変化の影響も考慮する必要があるであろう。しかし、これらの要素がどのように歴史的に混じり合い影響しあい、現在の漁民の信仰体系を生み出してきたのかについての考察をするには、まだ資料が不十分であると言わざるを得ない。ゆえにここでは、こうした影響の可能性を示唆するにとどまりたい。

3. ミャンマーにおけるナツ信仰

ミャンマー漁民の船霊信仰について述べる前に、ミャンマー独特の精霊信仰で

あるナツ信仰について簡単に説明しておきたい。ミャンマーの町や村を初めて訪れる外国人は道の端や家の敷地内に建てられた祠や、室内に吊るされたココナツと神棚に気づく。ミャンマーのナツ信仰との最初の出会いである。次に旅行者は、祠の中に祀られている神像が、ヒンドゥー神話やギリシャ神話のような異形の風体ではなく、普通の人間の形をしていることに驚くだろう。目につくミャンマーのナツはみな人間とおなじ姿形をしている。時に等身大に作られたナツ像は、まるで本物の人間かと思うほどに精巧に作られている。

ミャンマーの精霊信仰であるナツ信仰は、歴史的に独特な形で仏教と結びついてきた。ミャンマーのナツには、37の「大ナツ（公式ナツ）」、その他の有名なナツ、土地神、地域の守護霊、村の守護霊、木の精、水の精や少数民族のナツ等無数に存在し、ミャンマー人であっても、全てのナツに通曉しているわけではない。さらにナツは複雑に階層化し、独自の儀礼も存在する。大ナツは、パガン王朝（11世紀-14世紀）の最初の王アノーヤターが、庶民の間に存在する無数のナツとそれに対する信仰を整理／管理するため、公式ナツとして37のナツを「指定」したことに端を発すると言われているが、言わばこれがミャンマーにおける精霊信仰の「国家ライセンス」化であり、独特の「神仏習合」の始まりである。37の公式ナツは、ミャンマー神話のパンテオンであり、含まれる神々は相互に関連し合う。伝説上の英雄ミン・マハーギリとその係累、タウンビョン・ナツと呼ばれる兄弟ナツと彼らに関わるナツ等である。公式ナツのリストにはアノーヤター王時代の王家出身の人物も含まれているが、民衆に人気のある幾つかのナツ以外は、構成するメンバーは常に一定というわけではない。実際、パガン朝以後、この37のナツのメンバーはしばしば入れ替えられており、また民衆は自分の信奉するナツをこの公式ナツに含めたがる。37の公式ナツが揃っているとされるポッパ山麓の祠に立ち並ぶ神像が、19世紀末に最後の編集が行われたとされる37ナツのリストと異なることは以前の論文で述べたが（関 2016:1-30）、同様に37ナツの祠がすべて揃っているとされるミャンマー北部・タウンビョン村においても、その祠の中には、本来公式ナツに含まれていない「ウー・シンジー」祠も存在する。筆者は前掲論文の中でこのような地域的相違の原因は、ミャンマーの民衆にとって自分の信仰するナツが「37の公式ナツ」に含まれているということが重要なのであり、37のナツ全てを信仰することに価値をおいていないこと、他方でナツの階層性という

前提の下で信仰するナツの正統性の根拠とみなしてからではないか、と提起した。

4. ミャンマー東南部の船霊信仰

船を守る霊的な存在を信じる信仰は、アジア地域に限ることではない。西欧世界にも類似の信仰が存在する。例えばバルト海周辺に伝わるクラバウターマン(Klabautermann)は一種の船霊であり、木の精霊であった存在が、その木が船建造に使われたことにより船の精霊に転化する、という考え方は、タイのメー・ヤー・ナーン信仰に近い。

ミャンマー・最南部コータウン(Kawthaung)の漁民社会でも船霊信仰は盛んである。船霊は船首に宿るとされ、布を巻くことで船霊への畏怖を表現する。タイ漁民同様、船首部分に布を巻き船霊への畏怖を表現する。しかし、コータウンの住民はこの船霊を「ウー・シンジー」と呼ぶ。ウー・シンジーは、ビルマ族⁽⁷⁾に親しまれた非常に有名なナツ(男神)⁽⁸⁾である。厳密に言うと「船霊」というよりは、海に風をもたらす霊的な存在であるが、漁民たちの信仰は深く、漁に出る・出港前などに海上での安全を祈って船首に米で作った菓子や干したキンマなどを備え、ウー・シンジーの魂を呼び出す儀礼を行う。タイ同様、船首に布を巻くが、一緒にフトモモ草を備える場合もある。漁民、船乗りにおけるウー・シンジー信仰は、東南部に限らず、ヤンゴンを含むミャンマー全土の沿海部漁民・船乗りの間に広く普及している。タイにおけるメー・ヤー・ナーン信仰と同様である。布を巻けるような舳先のない形の船の場合は、船首部分に花を飾り、出港前に必ずウー・シンジーへの儀式を行うという。

ミャンマー内陸部にも同様の「船霊」信仰が存在する。エイヤーワーディー川沿いに住むバガンの漁民は、ガンジーシンという一組の男女の精霊を船霊として信仰している。二人は兄と妹であり、地域住民は、船(最近では自動車も)を購入した際は、ガンジーシンの祠に報告し、供物を供える。ガンジーシン信仰もやはり船首部分への船飾りによって示されるが、飾りは上下二重になっており、上の部分は仏教信仰、紅白二色の布(バウンドー)を巻いた下の部分は、ガンジーシンへの信仰を表すと言う。古くなった巻き布は川に捨てるか、ガンジーシンの祠の周囲の木に巻いておく。

このコータウンの船霊やガンジーシン信仰であるが、序章で述べた「女性が男性の航海を守るというのが船魂信仰」という定義に照らし合わせると、やや異なる印象を受ける。ガンジーシン信仰は女性原理が含まれているといえるが、コータウンは男性ナツである。舳先に飾る布は、タイと同様であるが、船霊が男性であるということは、違う原理に基づいた信仰とみなすべきなのであろうか。

タニンダーリ管区の最南端に位置するコータウンは非常に小さな港町である。前述の通り、タイとミャンマーで領有を争った地であり、ミャンマー・コンバウン朝の支配下に落ちて間もなく、英緬戦争により英国に割譲されている。この町が発展したのはその後のことであり、文化的にはミャンマーの核心地域からかなり離れている。民族構成も非常に多様／複雑であり、ビルマ族、タイ族、マレー・ムスリム、タイ・ムスリム、インド系ムスリム等が共に生活する地域である。船霊信仰を継承し維持する主要民族・文化が不在のまま現在に至っている。船で20分ほどで渡れるタイ・ラノー県との経済交流は、タイ文化の流入も引き起こし、タイの通貨バーツも通用する。ゆえに、船霊信仰においても、ミャンマーではなく、タイ文化や地域の近代史との関わりで再検討する必要がある。本稿では、このコータウンの事例から離れ、ミャンマーの伝統文化、ナツ信仰の影響を受けている漁村・漁民の船霊信仰を中心に考察していきたい。

「船霊」とは、船に宿る精霊のことで、日本においても漁民の間で古代から信仰されている航海安全と豊漁の守護神である（楠本 1993：207）。船霊は時化や災難、風や大漁を「鈴虫が泣くような音」で船人に知らせると言われる（川崎 1984：336）。日本における船霊研究は、民俗学を中心に昭和初期から始まり、日本各地の漁村で、盛んにその実態調査がなされてきた。

よく知られた「船霊」信仰は「御神体（男女一対の人形、サイコロ、髪の毛、五穀、古銭）」を帆柱を支えるツツに作った小さな穴に埋め込む（神野 2000：130）。地方によっては、船主の家に「船霊様」を祀ることもある（野口 1972：251）また、日本の「船霊」は一般的に女神と考えられており、女神の嫉妬を恐れるため、漁船は女性の乗船を嫌うという伝承がある。また、御神体としての髪の毛の採取、儀礼の担い手として女兒を重要視する地域も多い。

鹿児島を中心とした九州の民俗について研究する下野敏見は、船魂信仰は、青森県から鹿児島県の吐噶喇列島の間に存在する信仰であるとし、女性が男性の航

海を守るというのが船魂信仰の核心であると述べている（下野 2005a：312）。吐噶喇列島以南の沖縄地方に船魂信仰が存在しないのは、沖縄にはすでに生活全般において「女の霊力によって男性が守られる」というウナリガミ信仰が貫徹しているため、敢えて船魂を祀る必要はないからだという（下野 同上）。つまり下野によると、船魂信仰とは、ウナリガミ信仰に基づく信仰とみなされるのである。

昭和30年ごろまでの船魂様は、ほとんど決まった形になっていたのです。特に南九州地域では、数え歳7歳の女の子が夜中に、その前におばさんから教えられた通り、表の間に入って鉢で自分の髪を切り、用意された半紙に綺麗におくのです。薩摩では紙雛をこしらえて子供に与えていましたが、あのような雛人形を作るのです。

少女の髪を丸めて小指ぐらいにし、紙雛風に作るわけです。その長さはおよそ二寸五分から三寸ぐらい。それを男雛と女雛の二体作り、男のものは麻を使い、女のものは黒髪を使うという例も見られます。こうして作った船魂を無言のままもらって、そして船の所に行きます。船大工は誰も見ていない所で一人、その船の帆柱の下支柱の所に穴をあけて、そこに船魂を入れたのちふさいで、そして拝むのです。そのときに供える品物が櫛、口紅、鏡など、女性の化粧道具を中心に、神酒、餅、茶、米、塩、大豆などです。（下野 2005：310）。

一方で、男神のイメージで捉えられる伝承もあり、船霊＝女神図式が定着している初期の「船霊」研究に対して、再度、多方面から検討する必要性があるという意見も存在する（神野 2000：145）。しかし、船霊信仰の中に、こうした「女性の霊性」を特別視する信仰が存在することは間違いない。

この下野の定義する「女性が男性の航海を守る」信仰を前提とした船霊信仰は、ミャンマー漁村にも存在する。モーン州モーラミヤインの港に集まる漁民の間では、船霊として若い女性のナッである「マシンマー」を信仰し、同時に海を守るナッとしてウー・シンジーを信仰するという相違が存在する。つまり、ミャンマー漁民の信仰は、船霊一辺倒ではなく、海にまつわるナッや仏教への信仰と混じり合い、複合的な体系を作り出しているといえるのである。

アンソニー・リードは東南アジアにおいて、その精霊信仰と精霊信仰における

女性の役割は、東南アジアを東南アジアせしめる重要な文化的特徴であると述べている（リード 2002：221）。下野はこうした西南日本の船霊信仰は、沖縄の「オナリ神」と同種のものであるとみなしているが、ではミャンマーの女性性を持つ船霊は、船乗りたちとどのような関係にあるのだろうか。

4-1. モーラミヤインの船霊信仰

筆者は先の論文で、モーラミヤイン漁民に信仰される船霊「マシンマー」⁽⁹⁾について考察した。「マシンマー」は若い女性と考えられており、その根底には「若い女性が船を守る」という考え方が存在する。さらにミャンマーの場合、船霊への敬意は船首部分に巻いた布と、箱に収められた若い女性用の装飾品によって表現される。他方、船室には、仏像と共に海の神として信仰されるナッ



「ウー・シンジー」の額絵や同じく海を守るナッとして信仰される「シン・ウパクット」の坐像、モーン族にとっての「ヨウヤー・ナッ」（代々信仰されてきたナッ）であるバゴー・メードーが飾られる。この点は、船首部分に布を巻くだけのタイの「メー・ヤー・ナーン」とは異なる⁽¹⁰⁾。

古来、日本の漁民も船霊様だけでなく、信仰する神仏も船内に祀ることは普通に行われていた。関山守彌『日本の海の幽霊・妖怪』によると、江戸時代、時化が続いて操船の自由が奪われた船乗りたちは、髪を切り、それを船霊様や船内に祀ってあった神仏に備えた。祈願の対象となる神仏は、船霊の他に、伊勢大神宮、金毘羅大権現、観音菩薩、さらにそれぞれの乗組員が信仰する神仏などであった（関山 2005：124-125）。ミャンマーの漁民も同様に船の神と海の神、そして自らの守護神を祀りながら航海の安全や豊漁を願っている。

モーラミヤインの漁民たちによると、この船霊信仰はモーン族漁民に広く共有されており、「船霊」は若い独身の女性で「マシンマー」と呼んでいる。漁民は、

10月に漁を始めるが、その際に、18歳以上の若い独身の男女がマシンマーへの供物を供える役割を担う。供物は主に若い女性が喜びそうな装飾品である（写真2および3）。それから線香をあげ、ジュースを供える。

船に乗っている間は朝と夕方、このマシンマーに白米、料理、水を供える。但し、豚肉と牛肉を好まないなので、それ以外の料理を供える。若い女性の神様なので、若い男性の船乗りがお気に入りである。彼女のお気に入りになれば、夢に現れ、良いことを特別に教えてくれるという。舳先に巻いた布が古くなると、町のボーボーの祠に納めに行くが、行かない人もいる。ウー・シンジーも信仰しているが、それは船室の中に飾っている（写真4）。

こうした船霊と漁民の関わり方は、船霊が若い水夫の夢枕に立ち、遭難を告げるというという日本の船霊信仰に共通する（関山 2005：92）。神仏習合時代の日本の漁民たちは船霊だけではなく、同時に神仏も船に祀るのが普通であった。それは伊勢宮であったり、金比羅さんであったり、エビス神であったりする。自分たちが信仰する漁業の神・海を守る神仏である。壱岐・対馬の山の頂には、



写真2：マシンマーのために船首に供えられた日用品。衣服、手鏡、アクセサリ、日傘等を大きなタッパーウェアに入れて甲板の船首部分に置いておく。



写真3：マシンマーのためにもう一つ用意されていたタッパーウェアの中身。下着やアクセサリ、マニキュア、リップクリームなど。



写真4：船室内。仏壇の他、ウー・シンジー画や、海に風をもたらすとされるシン・ウパクット像が飾られている。

村人の氏神ではなく、航海業者や漁業者の神が祀ってあった（関山 2005：170）。また、信仰する神仏により禁忌も発生する。例えば、金毘羅さんを信仰する船乗りはカニを食べない（関山 2005：208）。こうした神仏の「役割分担」やそれに伴う「禁忌」の存在という点でも日本の船霊信仰との共通点は多い。

モーラミヤインの漁民の船霊「マシナー」信仰の聞き取りから、分かることは以下である。まず、船霊とウー・シンジーは別々の役割を担ったナツとして捉えられている。船霊は若い女性であり、ウー・シンジーは船霊より格が高く、他の神々と共に船室に祀られ、海が荒れるのを防ぐ力を有しているとみなされている。こうしたモーラミヤイン漁民の船と航海に関する信仰には、やはり「女性が男性の航海（船）を守る」という原理が存在するといえよう。

次節以降で、モーラミヤイン州パウン区の漁村やタニンダーリ管区ベイの漁村における船霊信仰について述べるが、その概要はモーラミヤインの「マシナー」信仰とほぼ同一である。漁民の船霊信仰はいまだ熱心に続けられていることは理解されるが、その歴史的変化については、さらなる調査研究が必要である。現代における船霊信仰が下野のいうところのウナリガミ（オナリ神）信仰を土台にしているのかどうかについては、現状では断言できない。しかし、兄と妹が一对になったナツは多く、前述のガンジーシンや公式ナツの筆頭であるミン・マハーギリも妹ナツと一緒に祀られることが多い。公式ナツにはマハーギリの妻も含まれているが、屋敷神として祀られる時は妹と一緒にである。地方のナツでも「兄と妹」の組み合わせが目立つ。こうした点を踏まえると、兄弟姉妹の中でも兄と妹の関係を重視する文化が存在するとも言えるかも知れない。

4-2. パウン区漁村の船霊信仰

モーラミヤイン市内から35kmほど離れたパウン区の幹線道路からさらに15kmほど海沿いに入り込んだところにA村がある（写真5）。アンダマン海に面したA村は、人口約1万人、およそ1,750世帯の住民が住む大きな漁村である。漁師たちは5～8人ほどが乗り込める中型の漁船を操り、魚、エビ、カニ等を求めて1ヶ月ほどの遠洋漁業に出る（写真6）。A村の人々は、船霊を「ラマインシマー」と呼び、篤く信仰している。

A村の漁民の操る漁船はいずれも、ラマインシマーへの供物を船内に乗せている（写真7）。供物は一つの箱に収められている。中身は、女性物のショール、ネックレス、香水、白粉、タナカ（タナカ木から作られる化粧品）、化粧品、マネキュア、髪飾り、口紅、ブラウスにロンジー等々、若い女性が身につける品々ばかりである。インタビューに答えてくれた船主は、ラマインシマーへの供物は、船首部分には置かず、大きな容器に入れて、船室の片隅に置いていた。

容器に入れられたラマインシマーへの供え物は、年に2回、中身を新しい品物に入れ替える。乾季・雨季の季節の移り変わり時期に変えることもあるが、取り替えずに放置していると、ラマインシマーが夢に現れ、供物の中身を新しくして欲しいと訴えることもあるという。箱の中身の品々を取り替えるのは女性の仕事であり、女性であれば年齢や未既婚を問わない。



写真5：パウン区の漁村A村

取り替えたならラマインシマーに新品を供えたことを報告する。古くなり取り出した化粧品や衣服は、村人やその子供たちに分け与える。村人にラマインシマーの容姿や年齢について尋ねると即答を避ける。なぜならラマインシマーの悪口をいうと、夢に現れた彼女に叱



写真6：A村の漁船

咤されるからであるという。

A村集落内は、屋敷神としてバゴー地方の土地神ナ
ンクライン（バゴー）・メー
ドー⁽¹¹⁾を祀る家が多い。また
村の外れの船着き場には、
ナंकライン・メードーの
他、ヒンドゥーの神である
カーリー・メードーやガネー
シャ等を祀った祠も存在す
る。村人たちは出航前にま
ずこれらの祠にお参りする。
平均45日間の漁に出ている
間は、毎朝夕、船上で、ラ
マインシマーに炊きたての
白米とおかずを供える。漁
師たちが寝起きする船室に
は、ウー・シンジーや仏像



が飾られており、これらの 写真7：ラマインシマーのために供えられる供物

神々にも航海中毎朝夕、お参りし供物を捧げる。船の中で酔っ払う行為をラマイ
ンシマーは嫌うので、船内での行動にも気をつける。魚のかかった網を引く前に、
「どうか豊漁にしてください」とラマインシマーに願う。

A村では、モーラミヤイン同様、ウー・シンジー信仰も盛んである。ある若い
船主（30才）は、数年前に酷い時化に遭遇したが、何とか乗り越え、村に戻るこ
とができたのは、ウー・シンジーに祈ったおかげだと述べる。ウー・シンジーは
ラマインシマーより格上のナッであるため力がある。一方、ラマインシマーは船
を守る神であり、船火事など変事が起こった時に知らせてくれるが、それを防い
だりする力はないのだという。

興味深いのは、ラマインシマーやウー・シンジーは、何か村人への要求がある
時は、彼らの夢に出てくるということである。就寝中の夢に現れ、不満や要求を

告げるという。こうした夢での神仏との遭遇はミャンマー人の信仰の語りに頻繁に出現するエピソードである。また、ラマインシマーの容姿を語ることの「禁忌」は、船霊「メー・ヤー・ナーン」の容姿についての質問に対し、漁民が率直な意見を述べたり、メディアで「メー・ヤー・ナーン」が登場するドラマが放送されたりするタイとは対照的である。

4-3. バイ市郊外漁村の船霊信仰

同じくアングマン海に面するバイの漁村でも同様に船霊が信仰されている。バイは、モーン州の南に南北に細長く広がるタニンダーリ管区のほぼ中間に位置する人口約20万人の港町である（地図1）。タニンダーリ管区の州都ダウェーに比べると人口規模は小さいが、水産加工業が盛んであり、真珠養殖でも有名な地である。近年、対中国輸出用のウミツバメの巣養殖も行われ、タニンダーリで一番富裕層の多い土地として知られる。水産業の他に、ゴムプランテーションやココナツ栽培も盛んである。地図1からも明らかな通り、バイは港湾都市であると同時に、タイ国境に近い町であり、直線距離で結ぶとミャンマーの中心都市ヤンゴンより、タイの首都バンコクの方が遥かに近い。ゆえにタイとの間には過去も現在も密接な経済交流が行われている。

バイ郊外の漁村CP村で、30代の女性にインタビューした（写真8）。彼女の夫も漁師であるが、小さな船に乗っており、一回の航海は数日から1週間程度である。彼女によると船を持っている人はみな、彼らが「マンシマー」



写真8：バイ郊外CP村

と呼ぶこの船霊を信仰している。信仰しないと船の仕事はうまくいかなくなると信じている。村人の中には、夢で見たことがあるという人がいる。

村の集落は海に迫る山に沿うように細長く続く。山の中腹には、村の祠（ヨウヤー・ナッ）があり、祠の中には柱が一本建っている（写真9）。村の人々は、出航時や特別な行事や何かがある時は必ずお参りする。その際は、木の実の煮汁と粘り気のある木を砕いた物を合わせた伝統的な洗剤を作り、この柱を綺麗に洗う。船の舳先も出航前に同じ洗剤で綺麗に洗い、ダビエの葉を飾る。そして船の船首部分にマンシマーのための装飾品や衣類を入れた容器を積み込む。



写真9：CP村の祠

この村では、船を作ったら出航する前に、まず供物を捧げ、占い師により船に降りてくる神を占ってもらおうという。ペイの漁民は仏教徒とヒンドゥー教徒がいる。同様に船霊にはミャンマーの船霊「マンシマー」とヒンドゥーの船霊（後述）の2種類があり、もしヒンドゥーの神が降りてきたと告げられた場合は、その神を船霊とし、その祠に挨拶にいき供物を供えて、航海安全を祈願する必要がある。

またこの村では、最近魚が取れなくなっているため、出航する前にマンシマーやウー・シンジーに願掛けを行い、豊漁で帰船できたらこういう供物を捧げます、とナッに約束することが多くなっている。例えばマンシマーは若い女性で良い香りが好きなので、香りのあるものを捧げる。あるいは、マンシマーへの装飾品や化粧品を新しく買い直す。それでも魚が取れない時は、舳先に巻いた布を新しいものに取り替えることもある。

女性を船に乗せてもマンシマーは怒らないが、マンシマーが怒ると考え、乗せない人もいる。また、男であれ女であれ船首部分は神聖な部分なので決して足で踏んではいけない。牛や豚は決して船に乗せないし、その肉も船には持ち込まない。もし、船内でこれらの肉を食べてしまうと、二度と港に帰ってこれなくな

るからだという。もし、うっかり船霊や船に乗せたナツが怒るような行動をしてしまった場合、村の祠のことを頭に浮かべ、謝罪する。そうすると、村に帰り着くことができるという。

以上のパウンやベイの漁村における信仰についての聞き取りから、漁民の船霊信仰が、陸地（村の祠）とつながっていることが分かる。



人々は、船霊「マ シンシマー」、海の神「ウー・シンジー」（写真10）と共に、信仰対象として村の祠を挙げる。出航前に村の祠に挨拶をするだけでなく、船上で船霊を怒らせてしまった時、彼らを陸地に戻してくれるのは、彼らが先祖代々祀ってきた村のナツである。船霊や海神、村のナツにはそれぞれの役割分担があり、それぞれの得意な場面で漁民の危機を救う存在とみなされているのである。

写真10：CP村で屋敷神として祀られるウー・シンジー

4-4. ヒンドゥーの船霊

さて、このヒンドゥーの船霊であるが、ブロー・カンマー（Bulaw Kanmar）と呼ばれる。やはり若い女性の神であり、ヒンドゥー教徒の船乗りたちを中心に信仰されている。ベイ、CP村の漁民は、占い師の託宣によっては、マンシマーではなく、このブロー・カンマーを船霊として招来するという。

ブロー・カンマーの祠は、ベイには存在せず、タンルウィン川を挟んでモーラミヤインの対岸にあるバル島北部のヒンドゥー教徒コミュニティの中にある。この島に移住してきたヒンドゥー教徒の中で、代々漁業を営んできた人びとの住むKP村の外れにポツンと立っている（写真10）。KP村の村人によると、ヒンドゥー教徒だけではなく、お参りに来る仏教徒（ビルマ族・モーン族）は多い。ベイの漁民にも信仰者がいる。

ブロー・カンマーを船霊として信仰する船乗り／漁民は、ライムとミョウガの

粉をこの神に供えて祈祷した後、それを持って帰り、白い布でくるみ船首部分に結び船霊とする。残った粉は船にふりかけることもある。無事、ブロー・カンマーへの祈願が成就し、豊漁で帰船することが出来た船乗りは、お礼に山羊を殺してそれを女神への供物とするという。



モーラミヤイン市内のヒンドゥー寺院の僧職（サドウ）によると、写真11：ブロー・カンマー（中央）

ヒンドゥー教徒の漁民が信仰する海神であり、海を守るガンガーデヴィの祠はインドにあり、ミャンマーにはない。ガンガーデヴィはシヴァの妻であり、インドでも有名な水の神でもある。他方、ブロー・カンマーはインドでは信仰されておらず、ミャンマーのヒンドゥー教徒のみに信仰されている神であるという。ブロー・カンマーはインドの一地域で信仰されていた土着神であったのかも知れない。

ブロー・カンマーというヒンドゥー神の存在とその信仰は、いつどのようにミャンマーに誕生し現在に継承されてきたのか、現状では不明な点が多いが、英植民地期にインドから移住してきた漁民が自身の集落で祀っていた神を持ち込み、それが東南部の漁民の信仰に取り込まれた可能性がある。

5. 漁民と「ボーボーギー」信仰

前述の通り、ミャンマーには「ナツ」と呼ばれる独自の精霊がいるが、その内実は、草木の精霊から、先祖霊、天人まで様々であり、またパガン王朝時代に定められた「公式ナツ」と呼ばれる37のナツや前述のウー・シンジーのように特定の人びとからの信仰を集めるナツや、シャン族、カレン族のナツというように民族固有のナツも存在する。その中でボーボーギー（Bo Bo Gyi ミャンマー語で「曾祖父」を意味する。）はやや特別な存在である。ボーボーギーは守護神であり、自然界に宿る精霊や公式ナツを含めた種々のナツよりは格上の存在とみな

される。ボーボーギーの多くは、パゴダ内にパゴダを守護する神として建てられる。神仏習合時代の日本の信仰でいうところの「鎮守神」の概念に近いであろう。その神像は通常、白衣に杖をもった老人の姿である（写真12）。

ボーボーギーは町の外れや小高い丘の上などに「地域を守る神」として建てられることがある。ミャンマー東南部の町、コートウンやベイにも町のボーボーギーが存在し、人びとの信仰を集めている。モラマインも同様であり、市内のあちこちにボーボーギーの祠が存在する。

ベイの町を守るボーボーギーの祠には、願掛けのために次々参拝客が現れる（写真13）。ナン・デイン（祠の管理人）の男性によると、ベイのボーボーギーはタニンダーリ管区全体に知られている有名なボーボーギーであり、家内安全や豊漁祈願、健康、ビジネスでの成功を祈願する人々がこの祠にやってくるという。このボーボーギーの加護を求める船主は船の写真を持参して、航海の安全を祈願する（写真14）。もし無事に漁／航海を終えて帰船したら必ずボーボーギーに報告し、供物を捧げる。

このように航海の安全や豊漁を願う漁民が、船霊やウー・シンジーに加え、ボー



写真12：パゴダ内に建てられたボーボーギー像（ベイ）



写真13：ベイの町を守るボーボーギー



写真14：船主がボーボーギー祠に持参した船の写真

ボーギーを信仰することは珍しいことではない。次節では、町を守るボーボーギーが複数存在するモーラミヤインを事例に、漁民のボーボーギー信仰について考察する。

5-1. モーラミヤイン漁民のボーボーギー信仰

本節では、モーラミヤイン市内のボーボーギーと漁民の関係を具体的にみてみたい。

モーラミヤイン市内の主要なボーボーギーの祠は5カ所⁽¹²⁾である（地図2）。市内の中心部の幹線沿いに3カ所、海沿いに2カ所ある。それぞれの名称と由来は以下の通りである。

①ミョーパワー・ボーボーギー
ミョーパワー（町の入口を意味する）を守るとされるボーボーギーである（写真15）。このボーボーギーはモーラミヤインの町全体を守るとされ、祠も大きく常に参拝者で賑わっている。ナン・デイン（祠の管理人）の男性によると、モーラミヤインの町が建設された時、町の外れであったこの地にボーボーギーが



建てられた。ミャンマーで 地図2：モーラミヤイン市内のボーボーギー祠（Google Mapに基づき筆者作成
は新しく町を作ると必ずその外れにボーボーギーの祠を作るのだという。祠には、等身大のボーボーギー立像の他に、仏像やウェイザー（阿羅漢）像、ウー・シン

ジーや様々なナツが祀られている。町を守るボーボーギーとされるが、ここに参る人びとの願いは様々である。特にモーラミヤイン市内でビジネスをする人びとの守り神とされているが、モーラミヤイン周辺の漁民の間でも信仰者が多く、祠で祈願した後、船全体とエンジンを守るために、バウンドー（紅白二枚の布。供物に巻いて奉納したりする）を持ち帰り、船首に巻いたりする。



写真15：ミョーバイン・ボーボーギー。雨安居期のため僧侶と同じ色の袈裟を着ている。

ボーボーギーやナツへの祈願は、必ず祈願成就の御礼を約束する必要がある。もし、祈願が成就した暁には、必ずその約束を実行しなければならない。御礼は供物（ラペイトウやゴマ、ニンニク）やボーボーギーへの着替え衣装の形で返される。

②ネーバイン・ボーボーギー 「地域のボーボーギー」と呼ばれ、モーン州全体を守るボーボーギーであるという（写真16）。このボーボーギーを信仰する人びとは、結婚式や得度式の前に挨拶に訪れる。他にも財運、健康祈願等で訪れる人びとが多いが、漁業関係者や船乗りが訪れることはほとんどない。祠の管理を任されている近所の女性によると、このボーボーギーは「地域のボーボーギー」であるが、以前は小さな祠であり、寄進者による現在のような大きな祠に改修されたのは1年ほど前



写真16：ネーバイン・ボーボーギー

であるという。

③タウンニョー・ボーボーギー（写真17）

ここはモウラミヤイン市タワイン地区を守るボーボーギーとされる。付近の住民への聞き取りによると、以前は小さな祠であったが、祈願が成就したという寄進者により2013年、現在の祠に立て直された。



④シュエカンニー・ボーボーギー（写真18）

カンニー木に宿るボーボーギーであり、別名モウラミヤイン・ミョーパイン・ボーボーギー（モウラミヤインの町のボーボーギーの意味）。ここは付近にヒンドゥー教徒のインド系住民コミュニティがあり、ヒンドゥー教の神々も祀られている。ナン・デインもヒンドゥー教徒の男性であり、ミャンマー語の他に、先祖の出身地インド、アンドラ・プラデシュ地方の言語テルグ語を話す。ここの祠も以前は小さな祠であったが、寄進者たちの努力で1952年に現在の大きな祠に改装された。ミャンマーのボーボーギーやナツと共に、ヒンドゥーの神々も祀られている。

また、ここのボーボーギーの祠の看板には「37のナツにお参りすることができます」と書かれている。しかし、実際は37のナツは全て揃っていないわけではなく、もっぱら住民の信仰が篤いものだけが置かれている。

ここの祠には、漁民が豊漁や安全航海を祈願してお参りすることが多い。彼らが熱心に信仰しているのは、ボーボーギーとウー・シンジーである。また、新しい車・バイクを購入した時



写真18：シュエカンニー・ボーボーギー脇の売店上の祠の看板

にここで安全祈願をし、バウンドーを求めていく人びとが多いという。

ナン・デインへのインタビュー時に、新しいバイクに乗った男女が交通安全祈願のバウンドーを求めにきた。幾ばくかの祈祷料を払い、ナン・デインによるボーボーギーへの挨拶と祈願の後、所有者はバイクの前進と後退を3度繰り返し、貰ったバウンドーを御守としてバイクのグリップ部分に巻きつける（写真19）。バウンドーが古くなると、古い布を持参し、祠敷地内の木に結びつけ、代わりに新しいバウンドーを貰っていく。



写真19：バイクに結び付けられたバウンドー

⑤ ニャーワイン・ボーボーギー 5つのボーボーギーの祠の中で最も海沿いにある（写真20）。1981年に建てられた。この祠のナン・デインは近所に住む商店主であり、場所も繁華な商店街の真ん中である。祠は豪華であるが小さい。

聞き取りによると、モーラミヤイン周辺の漁民が信仰するボーボーギーは、④シュエカンニーか①ミョーパワーのいずれかである。

モーラミヤインにはこの他にパゴダ境内に建てられたボーボーギー祠が存在し、さらに集落内に建てられた名もない小さな祠も含めると、多数のボーボーギー祠が存在すると思われる。その中でも規模の大きいこれらのボーボーギー祠は①と④の祠を除くと、いずれも近年に寄進によって建て直された祠である。今は目につかない小さな祠も今後、寄進者によって建て直される可能性がある。



写真20：ニャーワイン・ボーボーギー

以上の考察から明らかなように、地域の守護神であるボーボーギーはモーラミヤイン住民の間で今でも熱心に信仰されているが、各ボーボーギーには、それぞれ

の役割があり、信仰者は願望に応じ、願掛けをするボーボーギーを選ぶことが分かる。漁民はミョーパワーかシュエカンニーのいずれかを信仰し、車やバイクの運転者はシュエカンニー、ビジネスの成功を願う人はミョーパワーに参る。市内の各ボーボーギーにはこうした役割分担が出来ており、信仰する人々は、それぞれの願いを込めてボーボーギーに願掛けという「契約行為」を行っているように思われる。

また、シュエカンニー・ボーボーギー祠のヒンドゥー教との混じり合い、あるいはブロー・カンマーと呼ばれるヒンドゥー系船霊の信仰は、現代ミャンマー漁民の信仰のヒンドゥー教との習合がうかがわれ興味深い。

ミャンマーのナツ信仰に含まれる超自然的な存在は無数であるが、ミャンマーの民衆はあらゆるナツ神を信仰しているわけではなく、自分の生活と関わりのあるナツを自覚的に選んでいる。また、彼らの信仰するナツは、相互に役割分担がなされると共に階層化されている。船霊ラマインシマー（マンシマー）は船を守るナツであり、海はそれより格上のナツであるウー・シンジーに守ってもらう。船に乗り込む漁民たちの命は村のナツや、ナツよりも霊的に上位とされるボーボーギーに守られる。こうして船や漁民たちは階層化したナツたちに二重三重に守られることになる。

さらにボーボーギー祠での願掛け行為は、祈願成就の際にはかならずナツに「返礼」する必要がある。「返礼」として人々は信仰するナツに供物を捧げたり、祠建て替えの寄進を行ったりする。つまり、ナツ信仰を実践する人々の行為は、ナツと契約することにより、彼らを使役し自然をコントロールしようとする試みと考えられ、その意味において人間とナツの関係は互酬的である。精霊崇拜というと、我々は自然崇拜と同義と考えがちであるが、ミャンマー東南部の漁民のナツ信仰は、むしろ自然をコントロールするためのナツの「使役」を目指しているといえる。

しかしこのような漁民のナツ信仰は、それ自体、人々の日々の行動を律する道徳や規範を伴うものではない。ナツ信仰は突き詰めれば「ナツの機嫌をとって人間のために働かせる」ことにあるからであり、人間のように感情を持ち、気まぐれなナツは人々の行動の是非や善悪をそもそも問題にしないはずである。しかし実際は、ナツ信仰はその点で仏教に依存する。ボーボーギーはそもそもパゴダを

守護する神でもあり、そのため仏教に帰依した存在と見なされ、ミョーパワー・ボーボーギーのように雨安居期には僧侶と同じ袈裟を着た姿で飾られる。前述の通り、船霊を信仰する漁民が航海中は牛や豚を食べない、船上で酔っ払わない、というのも仏教由来の五戒禁忌である。こうして、ナツを慰撫すれば祈願が実現する、という道德律不在の行動は、仏教の五戒と結びつくことで、祈願者側の生活態度の節制も重要視され、また仏教に帰依しているということでボーボーギーは格の高いナツとみなされる。良き仏教徒として行動することがナツを喜ばせ、ナツも祈願者に対して利益を与えてくれるという、仏教とナツ信仰の習合が成立する。

結論

ミャンマー東南部漁民のナツ信仰ははまだ根強い。特に、彼らの生活の存続に関わる船霊信仰はその根幹をなしているといえる。マンシマー、ラマインシマーなどと呼ばれる女性の船霊の存在は、日本同様「女性が男性の航海を守る」信仰が核心にあると考えられる。漁村人口が激減し、船にまつわる民間信仰が見えにくくなっている日本とは対照的に、ミャンマーの漁村では漁民の宗教実践が活発に行われている。

今回の調査で明らかになったのは、ナツ信仰における選好と役割分担であり、もう一つは仏教の関わりである。ナツ信仰は、歴史的に独特な形で仏教と結びついてきた。前述の通り、ミャンマーのナツは、37の「公式ナツ」、その他の有名なナツ、土地神、地域の守護霊、村の守護霊、木の精、水の精や少数民族のナツ等複雑に分化すると共に階層化されている。ナツの中では格の高いナツとされる「公式ナツ」に、漁民の信仰する海神ウー・シンジーや土地神ナクライン・メードーは含まれていない。しかし漁民たちにとって、これらのナツは「公式ナツ」に含まれているナツ以上に信仰の対象である。ミャンマーにおけるナツ信仰の中心の一つである北部、タウンビョン村には、37の公式ナツの祠が全て揃っているとされるが、その中にはウー・シンジーの祠も含まれている。また、「37の公式ナツ像が揃っている」と看板に書かれているモーラミヤインのシュエテンニー・ボーボーギーも、そこに並べられているナツ像の中にはナクライン・メードー

が含まれている。これは、民衆の間でウー・シンジーやナンクライン・メードーに対する信仰が篤いことを示している。ミャンマーの民衆にとって自分の信仰するナツが「37の公式ナツ」に含まれているということが重要なのであり、神々が階層化しているナツ信仰においては、信仰するナツの格は機能における役割分担を考える上でも必要なのだ。ミャンマー東南部の漁民・船乗りのナツ信仰は、こうした無数のナツの中から、ミャンマーの民衆がどのようにナツを階層化し、選別し、信仰しているのかを知る上で具体的な事例を示すものとなろう。

ミャンマーの漁民たちのナツ信仰は、複雑であるが、同時に合理的な体系でもある。船霊が船を守り、ウー・シンジーが海の状況を管理し、さらに村の祠や地域のボーボーギーが船上の漁民それぞれを守護する。さらに、仏像が海・陸を含めた世界を統べる存在の象徴として祀られる。こうしたナツの役割分担は、人間がナツ（神）を使役して自然をコントロールしようとする試みであり、ボーボーギーやナツへの願掛けは言わば神と人間の「契約」である。つまり、ミャンマーの人々は支配権力によって取り決められた公式ナツをリストとして受け入れ、無自覚に信仰しているわけではなく、自分に「必要」だと考えられるナツを選び出し、選択された神々と契約関係を結ぶのである。頻繁に発生するボーボーギー祠の修復や改修は、このようなナツと人間の関係のあり方において理解される。

こうしたナツへの慰撫と祀り上げは、小松和彦の述べる日本の民間信仰における神の祀り上げと祀り捨てと共通する考え方であろう。人間が神に翻弄されるのではなく、人間が神を管理し人間の利益になるように行動してもらうのである。現世利益の追求はナツと「契約」という互酬的関係を築くことにより実現を目指す。一方で、仏教は現世の救済ではなく死後の世界／来世を約束する存在であり、契約を結ぶような存在ではない。ミャンマーの民衆は、こうして仏教を至上の存在とみなすと共に、ナツを階層化させ、その役割に応じて、選び取りつつ信仰している現代ミャンマーにおける「神仏習合」と呼べるであろうか。

また「ナツの慰撫」という信仰者の手段による現世利益追求行動は仏教的道徳により抑制される。ナツに気に入られるためには、仏教徒としての行動が必要となる。仏教に皈依した存在とみなされるボーボーギーだけではなく、船霊を喜ばすためにも、漁民は仏教の五戒を実践する必要がある。こうして、ナツとの「契約」と同時に「良き仏教徒」として生きること、漁民は願いが報われることを

期待する。もし、その結果が悪くても、それは自らの信仰が（仏教に対してもナッに対しても）不足していたからだ、と考える。

なぜ漁民はここまでナッを信仰するのか。海という異界を前にした漁民・船乗りの精神的安定、緊張緩和、不運に遭遇した時の諦観、様々な理由が思い浮かぶ。ミャンマーでも都会の高学歴中間層は、こうした民衆のナッ信仰に対し冷淡な態度をとる。しかし、都市住民の家にも屋敷神マハーギリーのココナツが飾られていたり、パゴダのボーボーギーには特別の敬意を払う。彼らも、選択的にナッを信仰しており、決してナッ信仰全体を否定しているわけではないのである。ミャンマーの人々は、ナッ信仰のどこかに関わりながら、仏教徒として何の矛盾もなく生活している。ミャンマー人の信仰における神仏習合的文化はいまだに人々の生活に深く根ざしているといえよう。

本論文は、科学研究費補助金（基盤研究B）「東アジアにおける宗教的シンクレティズムの社会学的研究－日本・中国・東南アジア」（研究代表者・関泰子）により2016年2月21日-26日、2017年2月21日～25日、ならびに8月17日～24日にミャンマーにおいて実施されたフィールド調査に基づく。

論文執筆にあたり、現地でのフィールド調査における通訳作業を引き受けて下さるとともに、ミャンマー語の表記と意味について助言を下さったKhin San Yee氏にこの場を借りて御礼申し上げたい。

注

- (1) 「米イージス艦衝突事故 7人犠牲に "水面下"で何が」(2017年6月19日) (<http://www9.nhk.or.jp/nw9/digest/2017/06/0619.html>)。
- (2) 「船魂」と表記されることもある。本論文では原則として「船霊」を用いるが、引用する文献に「船魂」と記載されている場合は、そのま「船魂」表記を用いる。
- (3) 本論考は、2016年2月21日～26日、2017年2月21日～25日、ならびに8月17日～24日にミャンマーにおいて実施されたフィールド調査に基づく。

- (4) ミャンマーの地名表記は、旧英語表記、現英語表記、ミャンマー語表記が併存する。バイは旧英語表記ではMergi（メルギー）、現英語表記ではMyeik（メイク）、ミャンマー語表記ではバイとなる。本稿では、現地での発音に基づき「バイ」と表記する。
- (5) ミャンマーの地方行政は7つの管区（Division）と7つの州（State）から成り、主にビルマ族が多く居住する地域が管区であり、州はビルマ族以外の民族が多く居住する地域となる。
- (6) 19世紀、コンバウン王朝時代のミャンマーは英国と3度にわたる戦争を行っている。英国との最初の衝突はベンガル地方の領有を争った第一次英緬戦争（1824～1826）である。この戦争に敗れたミャンマーは、ヤンダボ条約を締結。ミャンマー側はベンガルの領有を諦めた上、西南部アラカン（現ヤカイン州）と東南部テナセリム（現タニンダーリ）を英国側に割譲。現モーニン州の一部も英国側が占領し、モーラミヤインは英国人の居住する英領地域の中心都市として、第二次英緬戦争で下ビルマー帯も英国に割譲されるまで、重要な役割を果たすようになる。
- (7) 本論文では、国名は「ミャンマー」に統一し、特定のエスニック・グループを示す場合には「ビルマ」の名称を用いる。
- (8) ウー・シンジーは、エイヤーワディー川流域のビルマ族固有のナツである。ミャンマーのナツは、それぞれ典型的なイメージとして実体化している点がタイのピーと対照的であり、ウー・シンジーは、ビルマ族の伝統的衣装に身を包み、竪琴を抱えた美しい青年として描かれる。海神に好かれ、乗船中の船を海神から守るために、自ら海に身を投じたという伝説から、船霊信仰の「祭神」として祀り上げられたと考えられる。
- (9) 船霊の呼称には方言によりややばらつきがあり、後述のバイの漁村では「マンシマー」、モーニン州パウンの漁村では「ラマインシマー」と呼ばれる。
- (10) ただ、タイにおいても航海中は船首部分に座ったり、跨いだりすることはメー・ヤー・ナーンに対する侮辱行為として忌避される。
- (11) ナンクライン・メードーは、バゴー地域の土地神ナツ（女神）であるが、モーニン州においても熱心に信仰する人々が多い。神像は黒装束に身を固め、水牛の頭部を頭に被り、両手にそれぞれ雷魚を掴んでいるポーズで作られる。
- (12) モーラミヤイン市民への聞き取りでは「主要なボーボーギーは4ヶ所」との回答が多かった。その4つがどれであるのか、それぞれリストが違っていたり、1,2ヶ所しか回答を得られなかったりしたため、名前が挙がった5ヶ所を記載した。

参考文献

〈日本語文献〉

- 伊藤利勝編（2011）『ミャンマー概説』めこん。
- 川崎晃稔（1984）「船霊と刳舟」日本民俗研究大系編集委員会編『日本民俗研究大系』5、國學院大學、335-355。
- 楠本正（1993）『玄界の漁撈民俗-労働・くらし・海の神々-』海鳥社。
- 下野敏見（2005a）『南九州の伝統文化?祭礼と芸能、歴史』南方新社。
- ー（2005b）『南九州の伝統文化?民具と民俗、研究』南方新社。
- 関 泰子（2014）「タイ南部の船霊信仰」『立命館国際研究』26-4（143-166）。
- ー（2016）「現代ミャンマー社会における精霊信仰と「公式ナツ」をめぐる言説」『論集』148、1-30。
- ー（2017）「船霊信仰の比較文化論-日本・タイ・ミャンマー-」『論集』151、73-92。
- 関山守彌（2005）『日本の海の幽霊・妖怪』中公文庫。
- 野口武徳（1972）「南島の船霊信仰」古野清人教授古希記念会編『現代諸民族の宗教と文化-社会人類学的研究-』社会思想社、249-267。
- 野地恒有（2008）『漁民の世界-「海洋性」で見る日本』講談社。
- 橋本卓・橋本（関）泰子（2012）「タイ南部・ミャンマー東南部における船霊信仰-「メー・ヤー・ナーン」と「ウー・シンジー」、『アジアにおける精霊信仰の近代的変容-ジェンダー・地域・エスニシティに及ぼす影響-』（平成21年度～23年度科学研究費補助金（基盤研究(B)）研究成果報告書：研究代表者・橋本（関）泰子）、49-66。
- リード、アンソニー、平野秀秋・田中優子訳（2002）『大航海時代の東南アジアI』法政大学出版局。